

## 法華経と日蓮聖人の教えを

### 具体化し教化に活かすために

(一) 教学部会は、今回「立正安國論」を習学し活現するため

に」をメインテーマとし、木村勝行師の「檀家青年のための立正安國論」と石川教張師の「立正安國論の信仰的意義と近代人の見た立正安國論」の発題を中心に討議しあい、立正安國論並びに「立正安國」の祖願の重要性について共通の理解を深めあつた。

(二) 立正安國論の意義とその説き方に関する問題点については、次のような意見が提出された。

① 立正安國論は、現世安穏を説きあかした諫曉と誓願の書である。立正安國は、個人と国土社会の成仏を示し、法華經信仰を時代に活現させたものであり、実践宗教の根本とすべき教えである。

② 立正安國論は、日蓮聖人一代の信仰と教えの全体を通して理解していくことが必要である。立正安國は、日蓮聖人の独自性を示すものであり、それ故に一念三千論・戒壇論や法報應三身論・謗法の問題などの教説

と密接に関連している。また、他面では冷害・公害・利己主義や社会的危機の問題といった「現代」の時代状況との関連を通して追究すべき問題でもある。また、立正安國論に記されている「悪鬼・魔神來り國中に災難が起る」などの言葉の解釈だけに終始しやすい傾向がある。一般の人は、いちおう科学的なものの考え方にとっており、見方も多様になつてている。しかし、経文にもとづいて説きながら、これらの存在が人の心に現われる事実であることをよく説明すると共に、当時の社会的見方としてこのような考えが一般的になされていった背景を説明するよう心がけることが必要である。この意味で、立正安國論をいかに語ればよいか、という説き方がもつと工夫されるべきである。特に、日蓮聖人における立正安國の精神の活現のしかたを研究することが大切である。

③ 「立正安國の淨行」について（別稿）は、立正安國の

精神が法華經信仰を時代化させ活現させたものであるという観点から提示されている。これにもとづき「社会を浄め人の心を浄める」という浄仏国土と心身清淨の実践はきわめて現代に即応している内容であり、教学部会の結論的内容が述べられている。この世は、ほんらい仏国土である。その仏国土が謗法邪教によつて汚されている所から、立正安國の行動が必要となつてくる。日蓮聖人も、現実の人々の苦しみを共に苦しみとしながら災難の解決のために、やむにやまれず立上つた。そして、謗法の充満している末法の状況を正し、幕府を諫めて「実乗の一善」に帰依させて、仏国宝土を厳净しようとしたのである。同時に、立正安國論の奏進が「國土の恩を報せん」としてなされたよう、それは報恩の実践でもあつた点は大切な事がらである。仏国土を浄め、穢土を淨めて淨土を顯現するための「立正安國の報恩行」に私たちは取組まねばならない。日蓮宗としても、立正安國をたんなる名目としないで、その内容を深め実践する方策を考え、全面的に実行すべきである。

従つて、「立正安國の淨行」とは、社会と人間の心を清淨にしていく信仰と修行であり、立正安國の実践が社会と人間を救う淨行であると確認することができよう。また、日蓮聖人の報恩精神を徹底させていくこと

により、唱題の実践もでてくる。これは、立正安國の淨行にとつての根本であり、また発展と考えられる。

④ 「近代人の見た立正安國論」（別掲）について検討したが、宗門外の人々が日蓮聖人や立正安國論をどう見ていたかを知ることは大切なことであり参考になる。

特に、高山樗牛が「法華經の真理のために謗法の国家の滅亡を是認し、眞に正法によって淨められた國土をめざした」と日蓮聖人の願業を指摘した点は重要である。また、高山樗牛のほか矢内原忠雄、上原専禄の立正安國論認識に見られるように、法華經にもとづく政治社会のあり方を考え、立正を根本として安國をめざした立場を堅持していくべきである。これは、正法を本とし國家を從とする態度であり、宗教即政治の立場や國家至上主義の立場を意味するものではない。

⑤ 立正安國の内容を檀信徒・未信徒に向つて説いていく方法をもつと工夫していかねばならない。少くとも、一般向けに「立正安國論」のテキストを作成し、これにもとづいて習学する方策を具体化することが必要である。

△木名瀬寛明・石川教張△

# 近代人の觀た

## 立正安國論を習学するために

### (1) 高山樗牛『日蓮上人と日本国』

天外の疑惑に對する吾人の答辨は極めて簡単也。曰く日蓮は生の疑へる如く日本國の滅亡を意とせざりし生の所謂大不忠漢なりき。然れども驚くなれ、吾人の是の語を誤らざらむと欲せば讀者は先づ『國』てふ文字の眞意義を解せざるべからず。

此世に於て最も大なるものは必ずしも國家には非ざるぞかし。最も大いなるものは法也信仰也。而して法に事ふるの人も亦時としては國家よりも大いなることある也。是の如き人においては法によりて淨められたる國土に非ざれば眞正の國家に非ざる也。日蓮は即ち是の如き人なりき。

世の日蓮の國家主義を説くもの吾人数々是を聞けり。然れども畢竟是れ鼎負の引き倒しのみ。嗚呼國家的宗教と云ふが如き名目の下に自家宗門の昌榮を誇らむとする僧侶の口より其の國家主義を讚美せられつゝある日蓮上人は氣の毒なる哉。

日蓮の國家主義を説くもの必ず先づ立正安國論を引く。

曰く『國を失ひ家を滅ぼさば何れの處にか世を遁れむ。汝須らく一身の安堵を思はゞ先づ四表の靜謐を祈るべし』。又曰く『夫れ國は法に依りて昌へ法は人に依りて重し。國亡び人滅せば佛誰れか崇むべき法誰れか信ずべけむや。先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべし』。是の如きは吾人を見て見れば例へば一昨日御書に於ける『日蓮は生を此土に得たり豈我國を思はざらむや』と謂へると等しく尋常一般の辭令のみ。是によりて直に其の國家主義を論ぜむとする寧ろ大早計と謂はざるべからず。

法は其の對境として國と人とを要す。然れども如何なる國も如何なる人も悉く皆法の對境たり得べきに非ず。惡國は膺懲せざるべからず。惡人は戒化せざるべからず。是の如くにして適法の國と人とを造る毫も怪むべきに非ず。日蓮は眞理の為に國家を認む國家の為に眞理を認めたるに非ず。彼れにとりては眞理は常に國家よりも大也。是を以て彼は眞理の為には國家の滅亡を是認せり。否是の如くにして滅亡せる國家が滅亡によりて再生すべしとは彼れの動

かすべからず信念なりし也。

(2) 田中智学『大國聖日蓮上人』

佛法の邪正を正して正法の亂れを安じ、國の亡びるのを救ふべく一書を作ッて、

立正安國論ト名ケキ。其書ニ委ク申シタレドモ愚人ハ知リ難シ（類三五五）と断じて、此書の深い包容を語られて居る。

兎も角も、本書は表面國策的に動き出して、眼前の國難に對案し、進んで内亂と外寇を予言して、大々的警醒を与へた底に、「國と法」「法と人」「人と國」の三者の密接不可離の關係、並びに「物心一如」「神人一如」「現未一如」「政教一如」の融合原理を示された所に重點がある。随ツて上人の全宗教と切ツても切れぬ重大關係を有つものである。

本書は、上人一代の敷ヶ度の大小法難を産出す直接間接

の原因であつた。伊豆流罪も、龍口死罪も、佐度の遠流も、いはゞこの書の發表から生れた段々の結果である。それと共に此書の出現は、上人が自己の予言者資格を次第に高めて、遂に上行公表に進む素地となり「自界叛逆難」「他國侵逼難」の正確な予言となつたもので、即ち上人の宗教の事業的基礎たる本典として、上人一代を貫くのみならず、末代までも此書の意が延長して末法萬年の願業となるのである。

故に上人は屢々みづから之を講ぜられ、池上に於いて入滅の際も之を講ぜられた程で、いかに上人が、此書を重要視されたか、想い得られる。同時に上人の宗教と國家との關係が、如何に深遠な教理的交渉を有つかが理解され得る。

疾ク申シタランニハ政道ノ法ゾカシ（類三九一）

地震疫病の災禍や、内亂外交の國難は、正嘉文永ばかりでない。人間がすべて正法正義に還らざる限り、いつでも連續する。今もあるれ未來もある、國難から國難へと、世は

展悪して居るではないか。然らば「立正安國論」も、ヤハリ常に活きてものをいふ。大正天皇が上人に「立正大師」の徽號を賜はツたのも、この「立正」の二字が永遠の生命であることを公認されたものであつた。

即ち政道の根本としての新宗教は、靈と肉とを救ふ宗教即政治であつた。「立正安國論」の意義は、寧ろ懸かつて未来に存する。

(3) 矢内原忠雄『日蓮』（余の尊敬する人物）

日蓮の依り頼みは經文でありました。日蓮より後ること三百五十年にして、ドイツに現はれた宗教改革者ルツターが聖書を依り頼みとしたが如くであります。彼の言論が經文に立脚し、彼の生涯が經文に符合する時、日蓮は大磐石の勇氣をもつたのです。「日蓮は聖人にあらざれども、法華經を説の如く受持すれば聖人の如し。」（『佐渡御書』）

又「我身はいうにかひなき凡夫なれども、御經を持ちまいらせ候分齋は、嘗てには日本第一の大人なりと申すなり」。『撰時鈔』、この確信が、日蓮の戦闘力の根源であつたのです。

何が正法であるのかは、經によつて明かにせらるることである。經に基く正法をば、日蓮は最高の権威としました。正法とは眞理です。法即ち眞理は國よりも、師よりも、親よりも高くあります。日蓮の血には烈々たる愛國心が燃えてゐました。それに一時の疑もありません。併し日蓮は國を法によつて愛したのではありません。國は法によつて立つべきであつて、法は國によつて立つのではないか。立正が安國の因でありまして、安國によりて立正を得ようとするのは、本末顛倒であります。日蓮の目的としたものは國家主義の宗教ではありません。宗教的國家であります。國家の為めの眞理でなく、眞理的國家であります。

(4) 上原專禄「立正安國論と私」(仏教文学集)

日蓮は、その苦しみを觀念的には考へない。抽象化させないで、現実の苦しみをそのまま苦しみとして見る一種の庶民的苦惱觀を出发点として、その苦惱の根元をどうすれば払いのけることができるかということに問題を集約されました。

現世に対して保障ができるような仏教なら、後世安堵

ということも疑問になつてくるのではないか。仏教の実力あるいは効果は、現世においてリアルな苦しみがなくなつていくことを一つの証拠として保障されるという考え方です。この考え方は道元禪師のなかにもある。道元と日蓮とはずいぶんちがつてゐるようですが、「正法眼藏」には、國中が乱れたり安穏でないのは悪法が世間にはびこつております。善神がところを去つてゐるのでそつなるのであつて、正法が行われればおのずから國土は安穏になつてくるということが出てゐる。だから日蓮だけの思想ではない。ただ日蓮はそれをとくに強調した。

その際日蓮は大衆の現世の災難を、それこそ苦しみの実体だといふうに考へ、觀念化したかつこうでとらえると、それは法華の立場においては声聞縁覺の、いわば二乗の、觀念に立つインテリ的な苦難把握ということになるであろう。が、菩薩道の立場から大衆の苦しみを見ると、それは心の悩みなどというような、なまやさしいものではなくて、現実に流行病で人が死ぬ、暴風雨で吹き飛ばされてしまつて、五穀が実らない、また蒙古の軍勢が攻め寄せてきて日本の大衆が殺される、そのようなことが、現実の苦しみであるはずで、それをなくさねばならない。こうして日蓮の場合は、いわば大衆的発想による菩薩の把握と救済であつた。

それでは、日蓮は國家主義になりはしないか。そういう

疑問が出てくるかもしれないが、日蓮自身は、そうはない。つまり、立正安國ということは、法華信仰の正しいことの一つの証拠に他ならないのであって、仏者本来の立場からすれば、それによつて仏道にはいり得る一つの証拠に他ならないわけだからです。しかしここに、国土に対する仏教信仰の一つのあり方がある。たとえば、蒙古襲来といふようなことで国土が破壊されると考えた場合、どのような仏教が正しいか、どのような信仰が正しいかという観念的議論がいくらさかんであつても、そんなことは仏教興隆の証拠でもなんでもない。現実の場において国土が大切にされ、その国土が安穏になつていく、そういうことを一つの証拠として、そのような安穏にさせていける力をもつてゐるものとして、法華經信仰の正しさが実証されなければならぬというのが日蓮の立場です。

これは、「立正安國論」を掲げての日蓮の闘いであつたのです。当時の権力者、それと結ぶ学界・思想界のすべての権威を向うにまわしての闘いであつた。しかも理論的には十分に勝てるという確信をもつた、また勝たなければ法華經信仰は確立しないという気持であつた、そのようなぎりぎりの状態のなかでの闘いを通じて、日蓮は日本の仏教史のなかでもたゞいまれな仏教のあり方を見せてくれたのだと思われます。歴史のあるいは政治的な問題状況と、仏教者はどのように取り組むのかという問題のなかに、正し

い仏教信仰が確立されていく道を、日蓮は考えたのであって、單なる悟りとか往生とか成仏とかいうものを問題にしたのではないかた。

仏教といえば、この私がどう悟るか、この私がどう往生するか、ということだけが問題のように、私たちインテリとしては考えがちです。そういう一種の独善主義を、日蓮特有の仕方で徹底的に破つて、それを実際の闘いのなかで実践していく。すくなくとも私などの心の隅っこにしつこく残つている独善主義を警戒してくれるものとしては、非常にありがたいものであります。

「立正安國論」の私のとらえ方や評価の仕方は、専門家の立場からはずいぶんおかしいことが多いかと思うのですが、私はそれだからこそ、かえつて長い間一種の親しみを感じると同時に、これからも多分生きている感じゆう、私にとっては、ほげましの書物になるのではないかと思つてゐるのであります。

(昭和三十四年三月「在家仏教」より)